

令和 5 年度 第 2 回名取市地域学校協働活動運営委員会概要記録

○日時	令和 6 年 2 月 27 日（火）午後 1 時 30 分より
○場所	仙台法務局名取出張所 2 階 第 1 会議室
○出席者（7 名）	紙谷ゆたか委員、橋浦ふさ江委員、矢澤ユキ江委員、 佐々木健太郎委員、伊藤宗男委員、小沢静子委員、洞口のり子委員
○欠席者（2 名）	入間川徹委員、久米智美委員、
○事務局出席者	教育委員会 教 育 長 瀧澤 信雄 教育部長 齋藤 正光 生涯学習課 課 長 佐藤 徹也 " 課長補佐 佐藤 浩 " 生涯学習・青少年係長 菊地 栄一 " " 社会教育主事 小池 郁江
○傍聴人	なし

会 議 概 要

1 開 会 進行：佐藤課長補佐

2 あいさつ

瀧澤教育長

委員のみなさまにはお忙しい中、お集まりいただき感謝する。地域学校協働活動については、いろいろな活動に取り組んでいる。学習支援や登校中の見守り支援などボランティア的な活動が多いが、子どもたちと地域の方、学校の先生も含め、体験的な活動が多くなってきている。また、一部の中学校では不登校傾向の生徒に関わる取組もなされており、学校でも教育委員会でも感謝している。

昨年度、学校の先生方の地域学校協働活動の理解や認知はどうなんだろうという思いもあり、今年度生涯学習課で学校に出向いて PR したり、動画を作成したりしてきた。当初に比べ、先生方の認識もだいぶ変わってきたという印象がある。ただ、地域学校協働活動に意欲的に取り組めない要因として、教員の多忙感を多くの先生方が感じている。地域学校協働活動とは別に教育委員会として教員の多忙化解消に様々な面から対応していかなければいけないと考えている。

また、その他で話をさせて頂くがコミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）について、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」において、学校に設置することが努力義務と定められてから数年たっている。名取市でも令和 6 年度から試行的に館腰小学校に設置するよう準備を進めている。地域学校協働本部はこれまで通り取り組んでいただき、学校評議員を拡大して学校運営協議会として進めていく方向で検討している。館腰小の取組から課題等検証し、

他でも取り組むか検証していきたい。

委員のみなさんには、本日今年度の取組について忌憚のないご意見を頂戴したい。

伊藤委員長

本日は忙しいところお集まりいただき感謝する。

事務局から事前に資料を配布されたが、これを見て教育の不易と流行を感じた。教育には時代が変わってもこれだけはという人としての道を含めた教えと、そればかりではなく時の流れに対応する能力を身に付ける流行がある。全部の学校で3年が経過しているが、特にお年寄りをよく知ろうといった福祉に関わる活動は世相を反映している。これから考えていかなければならない部分である。子どもが少なくなっている。これはどうあればいいかということを含め、常に頭に入れて取り組んでいかなければ、子どもたちが名取を去っていくことになりかねない。名取を好きになる活動を行っていくことが大切だと個人的に考えている。

先ほど、教育長からコミュニティ・スクールの導入について話を聞き、前向きに何かを考え取り組んでいると感じられ安心している。

また、学校の先生方へのアンケートの変容についても、本日説明がある。どのように変化しているのかを聞き、委員のみなさんがどう考えているのかお話しいただければと思う。

会議成立の確認

資料①名取市地域学校協働活動運営委員会設置要綱を説明し、第6条第2項により、委員過半数の出席を確認し、会議成立を宣言した。

会議公開の確認

名取市審議会等の会議の公開に関する要綱第2条の規定により、公開の対象となる旨告げる。

傍聴席を設けていたが、本日の傍聴者はなし。会議録を作成の後、皆様にご確認いただく。

非公開の議事は予定していないが、非開示情報が含まれる内容となった場合、会議に諮り決定していくことを告げた。

伊藤委員長

最初に令和5年度の事業について、事務局よりお願いしたい。

事務局（小池社会教育主事）

大型テレビに今年度撮りためた各協働本部の写真をスライドショーにして投影しながら、花街神楽、名取音頭、閑上太鼓などの伝統芸能継承の取組や、街づくり・防災に関わる取組、夏祭り・子どもまつりへの参画、認知症サポート講座などの福祉に関わる取組が増えてきていることを説明した。

伊藤委員長

活動や要望の提案の矢印が学校から地域へ、地域から学校へなど、いろいろ複雑になり多

様化しているのが今年の特徴ではないかと感じる。意見等いかがか。

橋浦委員

閑上はもちろんだが、どの地区でも活動の内容がバラエティに富み多方面にわたる活動になってきている。お年寄りとのうまいコミュニケーションの取り方にしても、防災の取組にしても多方面に目が向けられている。企画をする人は大変だと思うが、学校からの要望もあり、うまくそれにマッチするよう取り組んでいてよいと感じる。閑上では、子どもをたくさん呼んだ企画を頑張って考え準備していたが、天候が悪く中止したものもあった。天気によって左右されながらも、様々な企画に子どもが喜んで参加でき、地域も子どもが頑張っているのを目にすることが、地域学校協働活動の大きな意味であり、地に足が付いた活動になっていくと感じる。

紙谷委員

公民館とうまく連携できるようになり、様々な取組ができるようになってきた。反省点としては、来年度の行事予定を調整する際に一緒に調整できなかったことである。

動画の中にあったが、閑上小中でも昔遊びの会を行っている。地域のお年寄りと学習した1年生は、どこに行ったら遊びを覚えてくれたお年寄りとまた会えるのかと聞いてくる。関わりが深まったことはとてもよかった。

橋浦委員

今年度、閑上では餅つきも行った。機械ではなく杵と臼でつきたいという要望があり、実施した。子どもが普段目にしないことを体験することにも意味がある。

洞口委員

全学校区で実施するようになり3年が経過する。当初は、地域からの提案が多かった印象だが、現在3年が経過し、先生方も変わったり、協力者も変わったりしながら活動に慣れてきた。学校も要望を言えるようになり、地域もより学校に話やすくなった。活動が広がってきた。3年でお互いの支えが見えるようになってきた。

伊藤委員長

3年という期間が支え合いを生んできたということか。

では、続いて、(2)今年度の振り返りについて、事務局よりお願いしたい。

事務局（小池社会教育主事）

P5 (2) 今年度の振り返りについて説明した。

「ア 学校支援活動について」の質問項目については、おおむね良好な結果となった。

「イ 持続可能な活動についての取組について」についての質問項目については、設立が早かった本部は何らかの取組を始めていることや、公民館での学びが好循環を生んでいること、また、少しずつ市民にも地域学校協働活動が浸透していることを説明した。中学校区、大規模校では、その浸透がゆっくりであるが、各地区、掲示板の活用や広報のチ

ラシの作成など工夫をしていることを説明した。

伊藤委員長

佐々木委員、いかがか。

佐々木委員

持続可能なという点で、質問がある。コーディネーターはどのように選出されているのか。教育委員会の一本釣りは今後世代交代を考えた時に難しいのではないか。何か具体的な組織と紐づいているのか。

事務局（小池社会教育主事）

コーディネーターの選出については、毎年この時期に本部長に次年度のコーディネーターを推薦してもらっている。任期は一年。その際、学校とも相談するよう声掛けをしている。現在のコーディネーターは本部創設時に本部長、学校とで相談して推薦された人が引き続き担っていることが多い。自治会長をしている方、健全育成会の方、民生委員の方、PTA をされていた方が多いように感じる。本部全体を見ると、役員に必ず PTA 会長を入れ、若い方も参画するようにしていることが多い。また、閑上のように、コーディネーターをしていた方を次の本部長に、一緒に活動している仲間を次のコーディネーターにというように計画的に世代交代を考えているところもある。

佐々木委員

そういう地域ごとの事例があると他の本部でもこういうふうに世代交代をしていけばいいというイメージがわく。地域によってはコーディネーターが複数いるところがあり、伴走しながら引き継いで世代交代しているというのもあると感じた。

小沢委員

会議に参加して2年目になるが、活動が軌道に乗ってきていると感じる。公民館だよりなどで地域の活動はしていたが、説明を聞いて各地様々な取組が広がってきていると思った。また、世代交代が行われている地区と、そうでない地区がある。こういう活動は、地域の同じような方が様々な役を担っていると感じる。新たな人にも関わってもらえるとよいと思う。

矢澤委員長

今回初めてこの会議に参加して、初めてこのような仕組みがあると知った。先ほど15の本部と市が委託契約をしていると話していたが、委託先はどこになるのか。

事務局（小池社会教育主事）

既存の団体ではなく、学校区ごとに一般の地域住民の代表を立てていただき本部長になっていただいている。その本部長を中心に協働本部を作ってもらい、その団体と市で委託契約を結

んでいる。既存の団体と結んでいるのではなく、学校を支援したい、地域を盛り上げたいという思いを持っていらっしゃる方の集まりである本部と委託契約を結んでいるということになります。

矢澤委員長

本部のメンバーは何人くらいいるのか。

事務局（小池社会教育主事）

本部には色々な方が携わってくれている。人数は本部によって様々である。少ない本部もあれば、自治会長全員が本部の役員になっているところもある。本部の役員が宛職になっていて、数年でメンバーが交代していく本部もある。

矢澤委員長

自分も子どもがいる立場として、なかなか地域と接する機会が少ないと感じていて、このよう
の仕組みがあって、体験活動や世代間の交流など、大変貴重な場だと感じた。

伊藤委員長

それでは、（３）今年度の成果について事務局より説明願います。

事務局（小池社会教育主事）

８・９ページ（３）今年度の成果について説明した。P9の資料「＜参考＞国が学校に対して、実施している地域学校協働活動の実施状況に関する調査」の大事に誤りがある。「国が」ではなく、「国が学校に対して、実施している地域学校協働活動の実施状況に関する調査」に訂正をお願いしたい。

ほとんどの本部で、効果や成果を以前より感じていることが伺える。学校の担当者が感じる地域学校協働活動による効果についても、おおむね効果を感じている。

昨年度も生徒指導と、運動意欲については効果として表れていないが、直接的な効果というよりも、問題の未然防止という意味での間接的な生徒指導や運動意欲の向上には、地域学校協働活動は一定の効果があると事務局では考えている。

佐々木委員

（２）の今年度の振り返りのところでも説明があったが、地区ごとの傾向、例えば大規模校や都市部の学校などで傾向があるのであれば教えていただきたい。また、中学校区の難しさについて触れていたが、個人的には小学校との連携が鍵になると感じる。

また、地域学校協働活動の本来の目標は「学校支援から地域学校協働活動へ」というキーワードがあったと思う。学校を核にして地域を活性化していくことがゴールになると考えられる。そうすると公民館がどう関わってくるかというのが一つの指標になるのではないか。学校の中に地域がどの程度入ってくるのかと同じように、公民館の活動の中に子どもがどう入ってくる

のか、公民館側のプログラムの広がりや参加者層などを検証していくと、学校支援活動にとどまらず地域が活性化していることを実感できる材料になるではないか。

伊藤委員長

地区ごとの傾向や公民館のかかわり方が分かる方がいれば教えていただきたい。

紙谷委員

閑上小中学校は開校6年目。地域も今街づくりをしている、公民館も新しい。閑上小中学校の8年生（中学2年生）は職業体験がある。その窓口が公民館になっている。基本的に閑上地区の企業を紹介してもらっている。中には公民館に職業体験に行く子もいる。また、その後公民館まつりがあり、職業体験の流れで公民館まつりの運営にも生徒が携わっている。

先ほどのアンケートの中でどの学校でも運動意欲の向上の質問項目に○が付いていなかったが、閑上小中学校はスクールバスを使っている。そのため、生活歩数が少ない。公民館に聞くと以前に比べ公民館に通う子が増えたと聞いている。生活歩数ということを考えると公民館との関わりは活動の幅が広がるだけではない効果があると考えられる。教育活動と生活がうまく連携し始めていると感じる。

伊藤委員長

名取市は小学校区に一つ公民館がある。増田西は小学校と公民館が隣通しで行ったり来たりしている。公民館だよりには必ず協働本部の記事が載っている。このような関係で、子どもたちは職員の顔を覚えることができている。学校が終わると宿題をしに公民館にくる子もいると聞いている。

橋浦委員

館長や職員がうまく子どもを引き寄せている。お正月には餅つきをしたり、子ども食堂も公民館でしたりしていて、子どもは足しげく公民館に通っている。

佐々木委員長

すごいことだと思う。それが見える化できるとよい。

事務局（小池社会教育主事）

印象としては子どもたちの公民館利用は増えていると感じる。愛島公民館では中高生を対象とした「公民館部」という講座も行われている。愛島小学校では、校庭が狭くクラブ活動が十分に行えないという理由で、公民館で公民館のゲートボールサークルと一緒に活動している。その流れで、公民館長杯ゲートボール大会に子どもたちが自分たちでエントリーし参加したと聞いている。また、伊藤委員長が紹介してくださったように公民館だよりを見ると、地域の工場見学や子供向けの料理教室など開催している公民館が見られる。それらの講座はすぐ定員になると聞いている。公民館ではそういった単発の講座では子どもの利用はあるが、継続した利

用についての悩みがあるようだ。しかし、比較的公民館を利用する子どもたちは増えていると感じる。スクールバスを待っている間に公民館で宿題を行うなどの利用の仕方もあるようだ。

伊藤委員長

何か、質問や意見はあるか。

では、(4)「教職員への地域学校協働活動を理解してもらうための取組」について、事務局から説明願います。

事務局（小池社会教育主事）

P10～13 (4)「教職員への地域学校協働活動を理解してもらうための取組」について説明した。

前回の調査を受け、今年度は教員向けの説明会の実施、動画の作成、チラシの配布を行った。地域学校協働活動を「十分理解している」「どちらかという理解している」と回答した教職員は82%と、6月の調査より28%増加した。「積極的に取り組みたい・取り組んでいきたい」と回答した教職員は9割を超えた。「あまり取り組みたくない・全く取り組みたくない」と回答した教職員もいたが、その理由を見ると、以前のように地域学校協働活動がわからないという意見や、否定的な意見という意見が減り、取り組みたいとは感じているが余裕がないといった回答になってきた。地域学校協働活動は、地域と学校の連携がスムーズになることで、教員の負担軽減が図られる。地域の方と話をすると、学校は忙しいと聞いているし、実際に忙しそうだが、具体的にどんなことが忙しいのかはよく分からないと話をされることがある。そのため教職員の理解の徹底だけでなく、地域や本部にも学校の現状を知ってもらい、スムーズな打ち合わせの仕方や地域からの提案の仕方などの研修を行う必要があると感じている。

伊藤委員長

先生方の意識で「意欲的に取り組んでいきたい・取り組んでいきたい」という回答が一割増えて9割になったというのは望ましいことだと感じる。

ご意見等いかがか。

紙谷委員

専属のコーディネーターが常駐してくれていればスムーズになると感じる。教員は公務分掌を受け持ちながら地域学校協働活動に取り組んでいる。地域と時間を合わせるのは難しい。自由に動ける人が必要。

洞口委員長

自分が子育てをしている際に、学校の先生が子どもの頑張りを色々なところで見せたいと話していた。公民館の職員もいる場だったので、公民館まつりなどの行事で発表してはという提案をしたが、先生方は月曜から金曜まで仕事があり、その他の土日まで子どもの引率をして、

出かけるのは大変。子どもの頑張りを見せたいという思いと休みが取れなくなるという気持ちもあると話していた。それを聞いて本業以外に関わってくれる人が専属でいれば、休みの日でもうまく活躍させることができたのではと今になって思う。

伊藤委員長

仲間と登下校の見守りをしている。学校の事務整理日のため子どもの下校が早い日があった。仲間が、今は教室に複数の先生がいるし、障がいのある子には別の支援員が付いている。教える人が増えているはずだ。昔は家に通信票を持ち帰り夜遅くまで書いていたのに、今の教員はわざわざ子どもを早く帰して書いている。教員一人に対する子どもの割合は少ないはずなのに、今の方が大変というのはどういうことだろうと不思議がっていた。

橋浦委員

仕事の内容が全然違し、発信する父兄や PTA がたくさんいる。世の中のニーズもものすごく変わってきている。

伊藤委員長

いろいろ多様な考え方もあるし、その対応も複雑化しているのだろう。

洞口委員

未来に生きていける力を付けてあげる、良さを認めるがゆえにお仕事がどんどん増えて行っている。昔は「だめだよ」で終わることが、今はそれができないというようなことがあり、すごく難しい。

伊藤委員長

先生方は一生懸命頑張っていると思う。

橋浦委員

近所の人、学校に9時まで電気がついて先生方が帰らないといっている。昔より人の配置が進んでいるが、それ以上の負担が普段見えないところにあると感じる。住民の人がみんな電気が消える時間を見て気の毒に感じている。

伊藤委員長

先生方は大変だと思うが、地域学校協働活動を共通理解してやっていきたい。
他に、ご意見等いかがか。

佐々木委員

先ほどの話の繰り返しになるが、いろいろな事例を見せていただき、地域がどう活性化していくか合わせて検証していくところにきていると感じている。現在、自分自身が県の生涯学習

課に携わっている。どんな世代のどんな人にも地域に居場所を作っていくことは大切だと考えている。そういった意味で公民館がどんな世代であっても、障がいがあってもなくてもいろいろな人が使える場になっていくことを目指していけるとよい。

また、コミュニティ・スクールに関しては、もしかすると管轄が違うのかもしれないが、確実に地域学校協働活動はそのベースになる。学校支援の部分は、そのままコミュニティ・スクールの一つの機能としてすぐ発揮していける。そこをどう移行していくのか、先生方が、また新しいのが来たという捉えにならないように、部局同士で連携していくことが必要だと考える。

中高生の話が出てきたが、人口流出と関わって成人期までどう地域で育てるか、どう育てたいかというビジョンがあると循環していくのではないか。成人を祝う会に帰ってきたいという思いをどう持たせるか、街をつくっていく視点があると夢があると思う。

伊藤委員長

その他の部分でコミュニティ・スクールについて、触れる予定だったが、ここで事務局から補足はあるか。

事務局（小池社会教育主事）

R6 から館腰小で導入していくことになっている。コミュニティ・スクールについては、学校教育課が担当になっている。学校運営協議委員の中に、一人はコーディネーターを入れていただくよう調整している。今後、地域学校協働活動の研修会でもコミュニティ・スクールについて説明していく必要があると考えている。また、導入予定の館腰小学校では、校長が大変意欲的である。学校教育課はもちろんだが、該当校とも情報提供をしながら連絡を密にし、コミュニティ・スクールと地域学校協働本部の連携の在り方を模索していきたい。

伊藤委員長

子どもも自分自身も自分探しであると考えたと考えると草刈りなどの活動でもある程度苦ではない。誰かと話をすると色々な話が聞けて新たな発見がある。そうすると来てよかったなと感じる。教職員のみなさんも参加してみれば、人間性が豊かになり子どもとの関係もうまくいくのではないかなと思う。市民活動をしていると、自分にはない他者の良さに気付く、新しい自分を見つけることができると思う。子どもにも先生にも、住民に色々な人と関わってほしい。

（議事一切を終了。）

4 閉会

14：40 終了

以上